日本占領下のインドネシアをめぐる「報道」と「宣伝」のはざまで

―朝日新聞社所蔵写真を手掛かりに―

姫本由美子†

How Asahi Shinbun Reported on Indonesia during the Japanese Occupation

—Photographs Taken or Gathered by Its Reporters during the War Period—

Yumiko Himemoto

Major Japanese news publications sent their reporters to Southeast Asia at the Outbreak of the Pacific War. Asahi Shinbun sent more than 30 correspondents to Java as did other publishers. Furthermore, trusted by the Japanese Military in late 1942, it set up the Jawa Shinbun and Borneo Shinbun Agencies in Jakarta and Banjarmasin and started publishing newspapers. For reporting on Java during the Japanese Occupation, over 150 photographs were taken by correspondents and almost 650 photographic materials including post cards were gathered. Those over 1,200 photos and materials on Indonesia are still kept in the Asahi Shinbun Osaka Head Office.

This paper aims to analyze those photographs and materials and to unveil activities of Asahi Shinbun both in Indonesia during the Japanese Occupation and in Japan.

First, the first president of Jawa Shinbun was examined. He had been in charge of propaganda-graph magazines titled *China Graph Magazine*（大陸画刊）published in Chinese and *Taiyo*（太陽）published in 7 languages, which were entrusted by the Cabinet Intelligence Office of Japan, before he was sent to Java. Asahi Shinbun was able to make a profit from them even in the midst of war. This fact indicates that Asahi Shinbun planned to publish the same kind of propaganda-graph magazine in Java in addition to publishing newspapers. The plan came to fruition when they began to publish *Jawa Baroe*, a propaganda-graph magazine, in Indonesian and Japanese.

Second, the above-mentioned over 1,200 photographs and such materials were examined to understand how they were utilized in Asahi Shinbun newspaper. Those photographs were used to promote the Japanese military government's vision of the 'Greater Asia Co-Prosperity Sphere' although there were also some articles mixed in with those photographs, which were taken because of the photographers' own interest. Also it turned out that the number of photographs with their photographers' name in Java decreased after mid-1943. This seemed to be due to the tightening of censorship from April 1942 in Java, and also because the Jakarta Branch of Asahi Shinbun was absorbed into Jawa Shinbun. Those photographs had more of a propagandistic nature, and helped the newspaper propagate the 'Greater Asia Co-Prosperity Sphere' even toward the end of the War. In the case of Borneo, most correspondents of Asahi Shinbun worked as members of the military news report division from the beginning, and they kept mentioning their own names on the back of the photographs.

† 早稲田大学アジア太平洋研究センター　特別センター員

Third, two graph-magazines, *Asahi Gurafu* of Asahi Shinbun and *Jawa Baroe* of Jawa Shinbun were analyzed. While the former credited the photographers' by listing their names with the photographs, which appeared in it, the latter totally dropped Japanese photographers' names as was the practice for a propaganda magazine. But photographs of them were exchanged between the two magazines, the same editor-in-chief was in charge of the both magazines, and they presented photographs that showed the initiatives of the Indonesian people in activities in Java. Because of that, *Jawa Baroe* in particular could attract Indonesian readers even though those presented in it were different from the facts.

It could be understood that during the Pacific War period Asahi Shinbun gradually became a Propaganda Publication through the above-mentioned processes.

はじめに

「大東亜戦争」の開戦と同時に，日本の主要新聞社は多くの特派員を東南アジアに送り，報道を行った。その一つ，朝日新聞社の従軍特派員はジャワだけでも 30 名以上に上った。さらに朝日新聞社は，1942 年後半に軍部の委託を受けてジャワ新聞社とボルネオ新聞社を設立し，新聞経営を行った。その取材活動を通して，特派員撮影の写真のみでなく絵葉書等の写真資料が日本の本社に集められた。インドネシア関連のものだけでも特派員等に撮影されたものが 250 点以上，そのほかの絵葉書等の写真資料がおよそ 1,000 点，合わせて 1,200 点以上となり，敗戦後の焼却処分を免れて朝日新聞大阪本社に保管されている（以下，それらの写真等を所蔵写真と記す）。

朝日新聞社の写真も含めてアジア・太平洋戦争時の報道写真等についての研究は，すでに行われている[1]。しかし，撮影者がそれらの写真をどのような状況で撮影し，またそれらの写真がどのような背景や意図をもって編集されて新聞や雑誌に掲載されたのかについての検討は十分なされていない。本稿は，これらの所蔵写真を手がかりにして，アジア・太平洋戦争時の日本およびインドネシアでの朝日新聞社の報道，特に新聞，雑誌に掲載された主にインドネシア関連の写真に焦点をあてて，その実態を明らかにしたい。

第 1 に，ジャワ新聞社の初代社長鈴木文四郎（1890–1951）に焦点を当てて検討を行った。鈴木はインドネシア赴任前に，朝日新聞社の出版局局長として内閣情報部等の委託を受けて刊行していたグラフ誌（中国向けの『大陸画刊』と「大東亜共栄圏」向けの『太陽』）の責任者であり，ジャワ赴任後に刊行したグラフ誌『ジャワ・バル（Jawa Baore，新ジャワ）』（以下，『ジャワ・バル』と表記）の刊行を当初から計画していたことを明らかにした。その背景には，委託費が確実に期待できるグラフ誌の刊行によって新聞販売の収益の伸び悩みを補うことにあった。

第 2 に，所蔵写真が『朝日新聞』においてどのように利用されたのかを検討した。特に，ジャワにおいては，検閲の強化，そしてジャワ新聞社による朝日新聞総局統合過程で，所蔵されている写真の撮影者の氏名が記入されなくなり，その結果「大東亜共栄圏」の宣伝にそれらの写真の利用が容易になった。

第 3 に，『朝日新聞』，そして新聞よりも編集者の意図がより反映されやすい雑誌として朝日新聞社が刊行したグラフ誌『アサヒグラフ』とジャワ新聞社が刊行したグラフ誌『ジャワ・バル』を比較した。宣伝誌であったグラフ誌『ジャワ・バル』には写真の撮影者名は一切記載されなかったのに対し，

[1] 例えば，『戦時グラフ雑誌の宣伝戦』（井上裕子著，青弓社，2009 年）。

『アサヒグラフ』は写真の撮影者名や「検閲済」の記載も必要に応じて行われた。しかし，両グラフ誌は同一の編集長が担当し，写真の交換も行ったため，類似点も多かった。「大東亜共栄圏」各地の人々の一体感を強調する編集を行いつつ，特に『ジャワ・バル』では，現地のインドネシアの人々が主体的に活動を行っている姿を強調した。それによって，現地で多くの読者を獲得した。一方『朝日新聞』は，「大東亜共栄圏」の各地域を個別に紹介するケースが多く，また現地の人々の主体性を強調することはなかった。

以上の分析により，朝日新聞社は，報道と宣伝の狭間で揺れ動きながら，戦時報道の限界の中で，「大東亜共栄圏」の宣伝メディアへと進んでいったことを明らかにした。

なお，日本がインドネシアへ侵攻した時，インドネシアはオランダ領東インド（蘭印）であり，1945 年 8 月 17 日にインドネシアとして独立を宣言するが，本稿では主に表記をインドネシアとした。

1. 日本占領期インドネシアでの報道活動の実態―報道の担い手たち―

（1）宣伝班を中心とした占領期初期の報道

1941 年 12 月 8 日の日本海軍によるハワイの真珠湾攻撃に数時間先立ち，日本陸軍はマレー半島に侵攻し，東南アジア地域の大半を軍事占領した。1931 年の満州事変以来中国を相手に戦っていた日本は，長期化の様相を呈していた日中戦争の教訓から，侵攻先の人々に対して宣撫・宣伝活動を行う必要性を認識していた。第一次世界大戦では，すでに軍事力を用いた作戦だけでなく，思想や経済などの分野での作戦を展開して民衆を動員する総力戦が展開された。日本陸軍は 1941 年 9 月に宣伝班（1942 年 12 月から宣伝部）を設置し，多くの文化人を徴用して，東南アジアへの侵攻準備にあたった。

軍事作戦上オランダ領東インドのジャワへの侵攻を担当したのは，陸軍第 16 軍であった。同軍内にも宣伝班が設けられ，宣伝班長には陸軍将校の町田敬二（1896–1990）少佐が任命された。町田は，それ以前から存在した陸軍報道班と宣伝班の違いを，前者は戦争の後方において戦況の情報を人々に報道するのに対し，後者は戦争の前線において人々を宣撫する役割を担っていると説明している[2]。しかし，ジャワを占領後宣伝班が発行した日本語日刊紙『赤道報』では，町田敬二の肩書は宣伝班長と報道班長が併記された。すなわち，占領期初期には宣伝班が報道の任務を兼ねていた。宣伝班に徴用された作家たちも例外ではなく，例えば武田麟太郎（1904–1946）は報道班員として 1942 年 4 月 6 日の『朝日新聞』大阪版夕刊には紹介されている。報道班員としてジャワ各地を視察し，報道に必要な資料を収集する一方，宣伝班員としてジャワの演劇集団を率いてジャワに駐留する日本兵やジャワの人々への慰問や宣伝活動を行った[3]。ジャワを占領した陸軍は報道と宣伝を区別せず，報道は中立公平な情報提供というよりも，いかに人々が陸軍の活動に理解を示し協力するようにしむけるかを目的とした，作戦上の宣伝色を帯びた広報活動であったといえよう。

同じく陸軍に徴用され宣伝班員となった作家の富沢有為雄（1902–1970）は，ジャワへの侵攻の道中に新聞課長となった。公式文書ではその事実は確認できないが，宣伝班の主だった文化人たちが町

[2] 町田敬二『ある軍人の紙碑』芙蓉書房，1978 年，p. 168.
[3] 『朝日新聞』1942 年 7 月 30 日東京版　朝刊.

田宣伝班長を囲みながら，ジャワでの宣伝活動の計画について話し合う中で決められた。中国での経験豊富な宣撫活動の専門家清水斉（1913 年生）は宣伝課長に，評論家の大宅壮一（1900–1970）は映画課長などと役割分担が話し合われた [4]。

富沢有為雄は，芥川賞を 1937 年に受賞する以前に新愛知新聞（現中日新聞）の記者をしたことがあった。1938 年の中国漢口攻略戦に従軍した経験もあり，新聞報道には大きな関心を持っていたのであろう。日本出発後に約 1 ケ月滞在した台湾高雄で新聞課長となった富沢有為雄などを中心に，宣伝班がガリ版刷り『赤道報』の発行を始めた。ジャワ上陸後の 3 月 9 日から『赤道報』，さらに『赤道報壁新聞』そして『うなばら』へと改題して宣伝班が新聞の発行を継続して担当した。ジャワ在住の将兵を中心とした日本人を対象とした宣伝班が刊行した日本語新聞『うなばら』だけでなく，インドネシア語日刊紙『アシア・ラヤ（Asia Raya，大アジア）』の創刊にも係った。

このように占領期初期のインドネシアでの報道は，宣伝班が担った。しかし，例えば 1942 年 9 月 9 日付『うなばら』に掲載されている写真が読売新聞提供であるように，日本の各新聞社の特派員も『うなばら』の発行に協力した。ジャカルタに派遣された新聞社の特派員による座談会も組まれ，その内容が掲載された。これらの特派員等の協力も受けつつ，宣伝班が現地日本語の新聞を発行した。

しかし，報道にかかわる人々の関係は複雑であった。町田敬二に代表される軍人，富沢有為雄等の徴用文化人，そして宣伝班には，日本の各新聞社から軍によって徴用された記者やカメラマンも含まれていた。その一方で，日本の主要な新聞社は日本軍のジャワ侵攻と同時に特派員を従軍させ，総局・支局を設置して取材にあたらせ，日本の本社へのニュース送信などの任務を課した [5]。

日本の新聞社は大きく分類すると 2 つの異なる身分の記者やカメラマンを派遣したことになる。第 1 は，軍に徴用され報道班員として報道業務に携わったものである。第 2 は，軍とは関係のない特派員である。前者は宣伝班に所属したため，報道は軍事作戦上の広報活動を意識しなければならなかった。後者は，特派員を派遣した各新聞社がジャワ侵攻と同時に設置した総局・支局に所属した。

ジャワには，朝日，毎日，読売（1942 年 8 月に報知と合併），東京，日本産業経済がジャカルタにそれぞれ支局（朝日は総局，のちに支局）を置いた。朝日，毎日，読売はスラバヤに支局，マランに駐在所を置いた。また同盟通信社も，昭南（シンガポール）の南方総局の指揮下にあったジャカルタ支局をもち，バンドン，スラバヤ，マラン，スマランの支局を統括していた [6]。これらの特派員は，ジャワに侵攻する陸軍第 16 軍に従軍する形で日本を出発した。朝日新聞社の場合，当時京都支局長であった信夫韓一郎（1900–1976）が団長となり，記者，カメラマン，無電技士など総勢 30 余名で従軍した [7]。この中には陸軍から徴用され報道班員となって従軍した特派員も含まれていた。他の新聞社の陣容もこれに近かった [8]。

以上を整理すると，侵攻・占領地ジャワでは，4 種類の出身・身分の異なる人々が報道にかかわったことになる。宣伝班の中には，軍人の報道員，徴用された民間の文化人，そして徴用された新聞社

---

[4] 西嶋コレクション　D-a-6　ジャワ軍政 13　清水斉『宣伝部回顧』.

[5] 戦前，主だった日本の新聞社はジャワには支局を置いていなかった。ジャワの日本語新聞『東印度日報』の記者などと通信員として契約を結び，同地の情報を得ていた。そして，何か重要な事項がある場合に，特派員を派遣して取材にあたらせた。

[6] 社団法人同盟通信社　南方総局『南方便覧　昭和十八年版（第一編）』, p. 32.

[7] 朝日新聞百年史編集委員会編『朝日新聞社史　大正・昭和戦前編』朝日新聞社，1991 年，p. 579.

[8] むのたけじ『たいまつ　十六年』岩波現代文庫　S198，岩波書店，2010 年，p. 38.

員の 3 種類の背景を持つ人たちがいた。それに加えて，各新聞社の特派員が係わった。彼らは，立場の違いこそあれ，すべて報道員と呼ばれ，（報）の記章を付けた。また，すべての記事は打電に事前検閲を受けなければならなかった。ジャカルタ支局の新聞記者たちは軍政監部に記者室を所有し，取材は原則として宣伝班を通して行うこととなっていた。ただし社会関連，雑ニュースは自由任意であった[9]。一方，宣伝を主任務とする宣伝班員は（宣）の記章をつけ，両者の関係は複雑であった。

例えば戦前に東インドの日本語新聞『東印度日報』の主筆であった谷口五郎（1902–1996）は次のように発言している。1941 年 6 月に第 2 次日蘭会商が決裂し，日本在留民総引き揚げとなり，彼は開戦前に日本に帰国していた。朝日新聞社のジャワでの通信員も務めていた谷口は，日本軍の侵攻にあたって朝日新聞社から，ジャワへの特派員団の信夫団長を助けるインドネシア通が熊本良忠（1909–1961）特派員のほかはいないので，ジャワへの従軍団に特派員として加わるように依頼を受けた。しかし，その直後陸軍に徴用されてジャワ侵攻に参加した[10]。彼はジャワ上陸とともに自分の仕事場であった東印度日報社に赴き，警備にあたっていた警察官に社内の掃除を頼み，新聞発行の準備を整えた。翌日，それを知らない宣伝班の徴用文化人たちが社屋にきて，一番乗りを主張し，谷口の動きの鈍さを非難した。両者の関係は必ずしも良好ではなかった[11]。

（2）ジャワ新聞社の設立

この報道員たちの間の微妙な関係は，1942 年 9 月に朝日新聞社がジャワの陸軍第 16 軍から現地の新聞経営の委託を受けて，ジャワ新聞社を設立したことによってより複雑となった。この朝日新聞社への委託は，1942 年 9 月 16 日に日本内地の陸軍報道部が「南方占領地域ニ於オケル通信社及ビ新聞工作処理要領」を決定したことからなされたものである。この処理要綱に基づき，陸軍報道部長より朝日新聞社に対して「従来の経験と能力とを活用し，その人員資材，資金を供出し，軍管理のもとに新聞社の設立並びにその経営を行い」また「現地軍政の施行に協力し，日本文化の進出興隆に努め，現地法人の啓発，原住民の教化に当たり，土語及び外字新聞の指導もしくは直接運営に任ず」るべきであるとの委託が行われた。

一方ジャワの第 16 軍は，大本営報道部の動きに合わせて，宣伝部において新聞刊行についての方針として「中央新聞統制案」を 1942 年 9 月初めに起案していたが，同案を正式決定し，朝日新聞社に通達した。同文書は，決定以前の案が確認されているが，その概要は次の通りである。

> 邦字紙ノ経営ニ付キテハ新タニ中央ニ於イテ指定セラレタル朝日新聞社ノ機構ノ一部ヲ利用セントス　即チ軍ノ指導下ニ「うなばら」ヲ委託経営セシメ邦人ニ対スル教化宣伝機関タルノ使命ノ拡充ヲ図ルト共ニ之ガ経営面ヲ拡大強化シ名実共ニ実質的中央紙タラシム[12]

---

[9] 社団法人同盟通信社　南方総局，前掲書，p. 32.

[10] 谷口五郎「インドネシアと共に生きて」（田村吉雄編『秘録大東亜戦史　蘭印篇』富士書苑，1953 年，p. 148.）

[11] 谷口五郎「ジャーナリストとしてみたジャワ軍政」（インドネシア日本占領期史料フォーラム編『証言集―日本占領下のインドネシア』龍渓書舎，1991 年，p. 270.）

[12]「中央新聞統制案」（早稲田大学大隈記念社会科学研究所編『インドネシアにおける日本軍政研究』紀伊国屋書店，1959 年，p. 590.）

とし，日本人に対する教化宣伝機関そして経営の拡充強化を使命として『うなばら』の経営を朝日新聞社に委託することを定めた。

> 朝日新聞社ヨリ派遣セラレタル邦字紙経営者ハ軍ノ意図ニ基キ宣伝部長ノ指導ノ下ニ『うなばら』ノ経営ヲ継承ス

とし，さらに

> 新ニ経営セラルル「うなばら」社ハ朝日新聞本社及各支局トハ何等ノ関係ヲ有セザル独立ノ経営形態タラシム　経営者其ノ他ノ従業員ハ軍オヨビ朝日新聞社ニオイテ人選ス　経営者ノ身分ハ差当リ軍属但シ無給嘱託トス[13]

と定めた。『うなばら』の経営は，朝日新聞社から派遣される経営者が「うなばら」社を設立して宣伝部の指導の下経営を行うが，それは朝日新聞社本社やジャカルタにある同社総局からは独立した経営形態を持つものとされた。すなわち，日本人向け新聞刊行における言論統制と経営監督の色彩を濃く打ち出したが[14]，経営者の給料については朝日新聞社が負担するという，中途半端なものであった。そして，『うなばら』の経営にあたっては，有料による販売制を原則とするが，赤字補填を趣旨として当面軍による買い上げ制度，あるいは保証金交付制度を採用する決定をした。また，「うなばら」社は，邦字新聞以外の邦字出版事業を認められたが，通信事業（ニュースコントリビューション）を行うことは認められなかった[15]。同案で記されている『うなばら』は，のちに『ジャワ新聞』と命名されたため，「うなばら」社はジャワ新聞社となった。これによって，それまで宣伝班が担ってきた新聞報道がジャワ新聞社へ移管された。

なお，原住民紙（インドネシア語）新聞に関しては，同統制案では「全島新聞一精神」の理想に向かい邁進し，その統制の母体をなす『アシア・ラヤ』と邦字紙『うなばら』との思想的表裏一体関係はあくまで強化持続するとしながらも，この時点では「うなばら」社の経営下には入れられず，引き続き宣伝班刊行のままとされた。また，華人系新聞も，漢字紙の存続を認めたが，華人系マレー語新聞の読者は原住民紙へ吸収されるようにする方針が決定された。

一方インドネシアは，侵攻にあたっての軍事作戦上の必要から陸軍と海軍によって次頁表 1 のように分割されて占領されていたが，その形がそのまま占領統治に引きつがれて陸軍占領各地では軍政監部が設置され，上記委託が行われた。海軍が占領していた地域も，海軍民政府が設置され，同様の委託が行われた。それらの地域での新聞経営の委託分担は，表 1 の通りである。

朝日新聞社が陸軍の委託を受けてジャワ新聞社を設立し，新聞経営にかかわることとなったのは「大東亜戦争」開戦後の 1942 年 10 月であった。そこには，どのような背景が存在していたのであろうか。

---

[13]「中央新聞統制案」（同書，pp. 590–591.）
[14] 同書，pp. 252–253.
[15]「中央新聞統制案」（同書，p. 591.）

表 1. インドネシアにおける占領軍による新聞発行委託分担地区

地域	占領軍	占領軍委託の新聞発行担当社 ・陸軍管轄下は 1942 年 9 月以降 ・海軍管轄下は同年 11 月以降
ジャワ	陸軍第 16 軍	朝日新聞社 （ジャワ新聞社）
ボルネオ（カリマンタン）	海軍	朝日新聞社 （ボルネオ新聞社） ※英領ボルネオは，陸軍第 25 軍の管轄下で，同盟通信社が委託
セレベス（スラウェシ）	海軍	東京日日（大阪毎日）新聞社 ⇒毎日新聞社として統合（1943 年 1 月） （セレベス新聞社）
スマトラ	陸軍第 25 軍	同盟通信社およびその他の提携新聞社
セラム・アンボン	海軍	読売新聞社 （セラム新聞社）

開戦前の朝日新聞社は軍の強硬姿勢に批判的であったが，1931 年の満州事変を契機に軍の行動に対して支持に転じた。その立場の転換については，朝日新聞社が 2008 年に刊行した『新聞と戦争』で自己点検を行っている。そこでは，その主な背景とし，軍の行動に好意的であった記者の情報に基づいて，軍の既成行動に対して背後から銃を撃つことはできないとトップが判断したこと，軍による圧力，右翼による暴力を用いた圧力，在郷軍人会などによる不買運動，新市場への期待，「中国の民族主義」と「日本の利権擁護」の両立の道筋を示すことのできない矛盾した論説の限界，などが指摘された。しかし，それらの状況に対処して，平和主義を貫くことができなかったと断定することはできない，と自省もしている [16]。

さて，ジャワへの攻略軍に従軍記者を派遣したことは，軍の行動支持への転換にかかわらず，報道を第 1 の使命とする新聞社にとっては当然の行為であった。しかし，ジャワ新聞社が委託を受けたことに関しては，『新聞と戦争』が挙げた背景のうち 3 つが中心であった，と考える。開戦という既成事実を前にして，軍を背後から打つことはできない，戦争に負けることはできない，とする「愛国」の立場は，ジャワでの占領に対しても同じであったろう。また，新市場への期待，そしてジャワでの「インドネシアの民族主義」と「日本の利権擁護」との矛盾において，「アジア解放」を唱えるだけで，インドネシア民族主義運動への十分な関心が実際は向けられなかったのではないか，と考える。

1942 年 7 月 3 日に，朝日新聞社の村山長挙（1894–1977）社長は，「第一線の皇軍将兵慰問と建設途上にある南方共栄圏視察」を目的に，上海訪問後に，サイゴン，ホーチミン，シンガポール，バンコクそしてジャワを視察した。そのころ，すでに日本の主要新聞社と軍との間で，それら新聞社が東南アジア各地で「文化工作」を担う話が行われていた [17]。村山社長の視察は，そのことを念頭に置いたものであると推測することは難くない。『うなばら』の活字が不足していることを知った村山が，日本帰国後に活字鋳造機等をジャワに提供した。それを評価したジャワの原田熊吉司令官が大本営へ具申を行い，朝日新聞社がジャワを担当することになった。朝日新聞社はジャワ担当の決定を受け

[16] 朝日新聞「新聞と戦争」取材班『新聞と戦争』朝日新聞出版社，2008 年，pp. 182–243.
[17] 同書，p. 260.

表 2. ジャワ新聞社歴代社長の在任期間

社長名	在任期間	主な活動
鈴木文四郎	1942 年 10 月 8 日―1943 年 5 月 1 日	『ジャワ新聞』と『ジャワ・バル』を創刊。
野村秀雄	1943 年 5 月 1 日―1944 年 6 月 26 日	朝日新聞社ジャカルタ支局を統合（1943 年 10 月）。月刊誌『新ジャワ』を創刊 .『ジャワ年鑑』を刊行。
東口真平	1944 年 6 月 26 日―1945 年 7 月 13 日	「○○週報」を創刊。飛行機事故で殉職。
益田豊彦	1945 年 7 月 13 日―9 月 28 日	ジャワ新聞社編集局長から東口の後任として就任。

て，ただちに諸般の準備委員として同社取締役鈴木文四郎以下を 10 月 8 日にジャワに派遣した。以降のジャワ新聞社の歴代社長は表 2 の通りである。

（3）初代ジャワ新聞社社長鈴木文四郎とグラフ紙

鈴木文四郎は，敗戦直後に朝日新聞社内で起こった民主化運動の中で厳しい非難を浴びたが，ジャワへの赴任当初は「自由主義者」と目されていた。1890 年に千葉県の豊浦村（現銚子市）に生まれ，東京外国語学校英語科を卒業した。東京朝日新聞社に入社後は，1918 年のシベリア出兵に従軍し，1919 年 1 月にはヴェルサイユ講和会議特派員となり，同年 11 月にロンドン特派員となる。21 年 11 月には，ワシントン軍縮会議を取材するための特派員として渡米し，軍縮を支持した [18]。

その経歴が「自由主義者」であるとの印象を与え，そのために軍情報部や内閣情報局からの評価は良くなかった [19]。それでは，なぜ彼がジャワ新聞社の初代社長に選ばれて派遣されたのであろうか。

ジャワ侵攻軍への朝日新聞社従軍団長であった信夫韓一郎 [20] は，ジャワに赴任する以前に中国の南京での特派員経験があった [21]。また，その後ジャカルタ総局長となった坪田耕吉（1898–1973）も神戸支局次長から 1938 年に中国へ特派員として赴任している [22]。次の阪本静一（1895–1953）総局長も中国の奉天の通信局長を経験していた [23]。彼らと比較すると，鈴木は異色の経歴の持ち主であった。

鈴木文四郎は積極的に仕事に取り組むタイプであったとされる。1923 年 1 月 25 日に日本で初めての日刊写真新聞『アサヒグラフ』が創刊されたとき，編集部長としてその立ち上げに尽力を注いだ。当時，小型のカメラが開発され，ロールフィルムも作られ，一般の人々にもカメラ熱が高まってきたこともあり，写真製版や印刷技術の向上に伴って，大衆向けの視覚的な写真を多用した誌面が求められるようになっていた [24]。この日刊新聞『アサヒグラフ』は，創刊 7 ケ月後の関東大震災で休刊を余儀なくされたが，10 月には週刊画報雑誌として復刊され，鈴木は 1925 年 1 月まで担当した。

また，1934 年 4 月 26 日に，『朝日新聞』の宗教団体幹部についての記事に不満を持った暴漢が東

---

[18] 鈴木文史朗著・文史朗文集刊行会編『文史朗文集』大日本雄弁会講談社，1952 年，pp. 341–342. 鈴木文四郎は，ペン・ネームとして文史朗の漢字を使った。

[19]『朝日新聞出版局五十年史』朝日新聞出版局（非売品），1989 年，p. 100，p. 122.

[20]『朝日新聞』1976 年 8 月 24 日　朝日新聞東京版　朝刊. 信夫韓一郎は，帰還後の 1943 年に京城支局長となった。（『朝日新聞』1943 年 12 月 25 日　東京版　朝刊 .）

[21]『朝日新聞』1940 年 4 月 9 日 東京版　朝刊.

[22]『朝日新聞』1938 年 2 月 4 日 東京版　朝刊.

[23]『朝日新聞』1937 年 6 月 5 日 東京版　朝刊.

[24]『朝日新聞出版局五十年史』，pp. 44–45.

京本社の編集局に侵入し，斬りつけられた鈴木文四郎は全治 4 週間の重傷を負ったが[25]，気丈にふるまう豪胆さを備えていたともいえよう。

鈴木文四郎は，1941 年 5 月に『アサヒグラフ』をはじめとする雑誌や出版物を扱う出版局に局長として戻った。当時，新聞からの収入は様々な制約から日中戦争前期のような勢いを失いつつあり，朝日新聞社の出版活動への依存度が高くなっていく時期であった。出版局でも，用紙不足により『映画朝日』『アサヒグラフ海外版』『コドモアサヒ』『アサヒカメラ』『アサヒスポーツ』『婦人朝日』が休刊していった。しかし，それに代わって『大陸画刊』『航空朝日』『科学朝日』『週刊少国民』『太陽』『図解科学』『ちから』の 7 雑誌が創刊された[26]。それが可能となった理由は，何らかの形で軍の意向に沿って刊行されたものであったからである。例えば，1940 年 11 月に創刊された『大陸画刊』は，大陸新報社から編集の委嘱を受けたものであり，『アサヒグラフ』の担当者が編集を行った[27]。大陸新報社は，対日協力政権であった中華民国維新政権下にあった上海で，陸・海・外務 3 省と興亜院の後援で設立され，中国の日本軍占領地で，宣撫的役割を果たすために華字日刊紙『大陸新報』を 1940 年 1 月 1 日に創刊した。朝日新聞社は，同紙の編集を担当する形で，経営に協力していた。同じ目的で刊行されたグラフ誌『大陸画刊』の編集も担当した。同グラフ誌は用紙も印刷も上質であり，また中国語であったために軍による検閲も厳しくなく，文化的内容が濃いものであった。『航空朝日』や『科学朝日』については，前者は陸海軍から賛助を受け，後者は陸軍報道部や情報局が工作機械などの平易な技術誌の出現を希望していたために創刊が可能となった。そして，1942 年 7 月に創刊された『太陽』は，内閣情報局の委嘱で創刊された 7 言語［日本語，中国語，マレー（インドネシア）語，ビルマ語，タイ語，安南語，英語］による南方向けの宣伝グラフ誌であった（ビルマ語とタイ語は 1943 年 9 月から消滅）。『大陸画刊』と同様，『アサヒグラフ』が編集を担当した。当時大きな存在感を示していた総合誌『中央公論』や『改造』が弾圧を受けていき，それらの出版元の出版社が逼塞を余儀なくされるなかで，朝日新聞社の出版局は，軍部や内閣情報局などの宣伝誌を請け負う形で新聞社の屋台骨である新聞経営を支える役割を果たすようになり，その方針が敗戦まで継承されていく[28]。

朝日新聞社は，新聞に加えて『大陸画刊』や『太陽』などの海外向け宣伝グラフ誌をジャワでも刊行することを念頭に入れて，軍部から委託を受けた刊行物の出版に通じていた出版局局長の鈴木文四郎を送り込んだのではないかと推察される。事実，陸軍第 16 軍によって朝日新聞社がジャワでの新聞経営の委託を受けることとなった前出の「中央新聞統制案」には，邦字新聞以外の邦字出版事業が認められていた。鈴木文四郎は，本社の出版局長を兼任する形で，初代ジャワ新聞社長に就任した[29]。また，小林秀二郎（1893–1954）も出版部長として同行したが，彼は 1941 年 10 月 1 日から『アサヒグラフ』と『大陸画刊』の編集長を兼任し，1942 年 7 月 10 日創刊の『太陽』の編集長も兼任していた。

---

[25]『朝日新聞小史』朝日新聞社，1957 年，p. 87.

[26] 朝日新聞百年史編集委員会編，前掲書，pp. 612–613.

[27]『朝日新聞出版局五十年史』，p. 97.

[28] 1944 年 8 月 30 日創刊の『図解科学』は，1994 年 7 月に廃業命令を受けた中央公論社から同雑誌の出版権を買い取ったものであり，1944 年 9 月 1 日創刊の『ちから』は，産業人・労働者の戦意を掻き立てるために，大日本産業報国会の機関誌として，同会から編集実務の委嘱を受けて刊行された。（『朝日新聞出版局五十年史』，p. 106，p. 124，「出版局組織図表」，p. 5.）

[29]『朝日新聞』1942 年 12 月 8 日東京版　朝刊.

ジャカルタに着任後，鈴木文四郎は 10 月中旬から日本語新聞刊行の準備を行い，12 月 8 日付を持って日本語新聞『ジャワ新聞』が陣中新聞『うなばら』を継承して創刊された[30]。さらに，翌年の 1943 年 1 月から小林秀二郎出版部長の下，日本語とインドネシア語によるグラフ誌『ジャワ・バル』が創刊された。その後，やはり本社の出版局編集部員であった松野志気雄（1902–1951）もジャワ新聞社に出向した。彼は，小林秀二郎に代わって『ジャワ・バル』を担当する一方，1943 年 12 月から『アサヒグラフ』と『大陸画刊』の編集長を兼任し，休刊直前の『太陽』の編集長も 45 年 4 月から務めた。『アサヒグラフ』『太陽』及び『ジャワ・バル』は相互に写真原稿を交換し，編集の上で提携した[31]。以上の編集担当者の兼任等に鑑みると，『大陸画刊』も提携に加わっていたと考えられる。4 誌で写真を交換すれば，経費も節約できたはずである。この事実は，内閣情報局が海外宣伝用グラフ誌『フロント』の刊行を東方社に委託したことと考え合わせると，軍部や内閣情報局が大東亜共栄圏の宣伝のためにグラフ誌を委嘱して作らせる方針を取り，それに朝日新聞社が乗じていったと捉えるのが妥当であろう[32]。

鈴木文四郎は，1943 年 3 月末にジャワを後にし（辞令上の在任期間は，1943 年 5 月 1 日まで），朝日新聞本社の出版局局長の仕事に専念する。『太陽』の 1943 年 7 月号で同誌の編集室が紹介されているが，出版局編集局長として椅子に腰かけている彼の写真が掲載されている。

それでは鈴木文四郎のジャワ新聞社での仕事は，軍から委託を受けて新聞・雑誌経営を行い，ジャーナリズムの第 1 の使命である報道よりも，朝日新聞社の仕事を確保するために，軍の意のままの情報を盛り込むだけの広報あるいは宣伝活動であったのだろうか。第 2，3 章では，彼が責任者となり，写真原稿を交換し，編集で提携した『アサヒグラフ』および軍から委託を受けて刊行した宣伝誌『ジャワ・バル』に主に掲載された朝日新聞大阪本社所蔵の写真の特徴を明らかにしたい。第 4 章では，その所蔵写真の特徴を手がかりに，『アサヒグラフ』，『ジャワ・バル』，そして『朝日新聞』を比較して，それらの刊行物の特徴を検討したい。その前に，鈴木の部下等が彼の仕事ぶりについて触れているエピソードを記して，彼のジャーナリストとしての立ち位置を示したい。

『朝日新聞社史　大正・昭和戦前編』によると，ジャワの新聞発行の担当が朝日と決定されると，「国賊朝日が来るのか」「大新聞資本の進出反対」などと主張する者もいて，初代社長となった鈴木文四郎への風当たりは強かった。軍宣伝班の大宅壮一，富沢有為雄らも「毎日」派で，この決定に憤慨したという[33]。しかし，ジャワ新聞社取材部長であった河合政（1901–1981）は，ジャワ占領軍の参謀部等が鈴木を「自由主義者」呼ばわりし，自由主義新聞を凝らしめてやれ，という雰囲気となったと記している[34]。また作家であった富沢有為雄は，ジャワ赴任前に『朝日新聞』に連載するための小説執筆を引き受け，帰還後に同紙に寄稿もし，反感を持っていたとはいえない[35]。宣伝班が反対したのは自分たちが手塩にかけて育ててきた『うなばら』を他に渡すことへの不満だったと言えよう。さら

[30] ジャワ新聞社『ジャワ年鑑　復刻版』ビブリオ，1944 年，p. 176.　原著は 1944 年に刊行。

[31] 『朝日新聞出版局五十年史』，p. 105.

[32] グラフ誌を海外宣伝用に刊行する動きは，他にもみられた。たとえば，「戦う日本の姿を写真によって共栄圏各国民に理解徹底させようと写真協会，国際観光協会が共同編集した各国版の共栄圏向けグラフの第一号が出来上がった」ことが朝日新聞で紹介されている（『朝日新聞』1943 年 2 月 21 日東京版　朝刊）。

[33] 朝日新聞百年史編集委員会編，前掲書，p. 618.

[34] 河合政「ジャワの日本人」『秘録大東亜戦史　蘭印篇』，pp. 26–27.

[35] 「富沢有為男書簡　坂崎坦宛」1935 年 8 月 15 日（早稲田大学図書館蔵）．『朝日新聞』1943 年 1 月 19 日–22 日東京版　朝刊。

に，毎日新聞社も大新聞資本であることには変わりない。そもそも朝日新聞社を選んだのは，ジャワの軍司令官であった。以上の点を斟酌すると，軍部の反発は，朝日新聞社に対してよりも，鈴木個人に対する反感だった。当時，ジャカルタ総局の特派員であった武野武治（1915–2016）も，朝日新聞社というよりも鈴木個人への反感が強かった，と述べている[36]。

鈴木文四郎への反感から，参謀部の軍人たちは『ジャワ新聞』創刊を披露する祝宴にも出席しようとしなかった。そこで鈴木は，旧友の初代南方軍軍政総監であった黒田重徳（1887–1954）中将を招待して面目躍如とした[37]。そのような経緯を考慮して彼は，日本帰国後の 1943 年 4 月 10 日に本社の講演で，「ジャワ新聞といえども朝日の分身ではなく『軍政の一翼』という建前である」と，ジャワでの立場を説明している。しかし，次のような逸話もある。筆を取ることが大好きであった彼は，『ジャワ新聞』に自分のコラムを持っていた。そこに，「生産生産というが，インドネシア人を絞り上げる一方ではいけない。徳川時代の百姓政策のようなやり方には賛成できない」といった趣旨の原稿を書き，軍を刺激することを避けたいと考えた編集部長の飯島保（1903–1994）が削除しようとして大喧嘩になった。鈴木は「言いたいこと，書きたいことを書いて，軍に追われるなら，追われて朝鮮へでもどこへでも一緒に行こうではないですか」と言ったという[38]。ジャワに赴任するまえにも出版局局長として『週刊朝日』に巻頭言を書いていたが，その編集長は，鈴木の書いた原稿を彼に気づかれないように深夜に表現を和らげることが自身の役割であった，と話している[39]。

鈴木文四郎は仕事熱心であったため，新聞経営が困難を増し，軍部等の資金提供による雑誌等の刊行に活路を見いだすことに対して，抵抗感を持たなかったのではないだろうか。軍部の資金によるものでも，自分の意見を書き発表する場が与えられれば，資金提供者に媚びることなく自分の意見をためらわずに表明するタイプであったと考えられる。しかし，戦時の言論統制に加え，軍部の委託を受けた新聞，雑誌の刊行において，自らの意見を 100 パーセント表明するには，意識的にも無意識のうちにも大きな制約があったはずである。さらに，欧米通であった鈴木はインドネシアの民族主義運動など，現地の人々の動きについては十分な知識を持っていなかったと考えられる。そうした制約や限界を乗り越えるためには，いくつかの歯止めを用意しておくべきだったのではないか。例えば，ジャワ新聞の仕事を批判的に見てくれる他社の目，すなわちジャワに派遣されている他の新聞社や朝日新聞社のジャカルタ総局の記者たちの目を意識し，それらに注意を払うことである。事実，朝日新聞社のジャカルタ総局の記者の中には，軍部の委託によって経営されているジャワ新聞社を「軍の御用新聞」と冷笑してみる者もいた[40]。しかし鈴木は，その点，無頓着，あるいは自身を過信していたのではないだろうか。なお，『ジャワ新聞』の発行数は約 10,000 部であった。

（4）軍による新聞統制強化およびジャワ新聞社・朝日新聞社ジャカルタ総局の統合

『ジャワ新聞』の創刊日と同日にジャワ新聞会が発足した。同会の目的は，新聞関係者の相互の親睦と事務の連絡，相互扶助の機関として機能させ，戦争完遂のために新聞企業，関係者を指導して，

[36] 武野武治へのインタビュー（2014 年 8 月 14 日，埼玉県にて）.
[37] 河合政，前掲エッセイ，pp. 26–27.
[38] 萩森健一「本社の南方諸新聞経営　新聞非常措置と協力紙」朝日新聞社史編集室，pp. 19–21.
[39]『朝日新聞出版局五十年史』，pp. 100–101.
[40] 萩森健一，前掲文書，p. 50.

原住民の啓発を過ちなく行えるようにすることであった。さらに，インドネシア語新聞および華字新聞の統制強化を目的として，1943 年 12 月 15 日に治政令等 51 号をもって，ジャワ新聞会を改組し，軍政会計より資金を拠出して，それらの新聞に日本人の指導員をつけて直接経営を行うこととした [41]。1942 年 12 月に発足したジャワ新聞会の理事長には鈴木文四郎が就任したが，43 年 12 月に改組されたジャワ新聞会では，鈴木の後任で当時ジャワ新聞社社長を務めていた野村秀雄（1888–1976）が会長となった。

このジャワ新聞会の活動の実態は十分に明らかになっていないが，それまでの親睦的性格が強かった会が，軍によるジャワ新聞界，しかも日本の新聞社の支局だけでなく，現地人の経営による新聞社を直接統制するための組織へと改編されたものであった。そのために，現地人の経営による新聞社を中心として軍が機械，工場などを貸与し，あるいは必要に応じて資金援助を行うようになった。ジャワ新聞社の記者が日本人の指導員として現地新聞を監督した。しかし日本人の指導者たちは，言葉の問題から十分な活動を行うことができなかった。実際，インドネシア語の新聞については，言葉を理解する谷口五郎と熊本良忠が中心となった [42]。日本人指導者は，華字新聞の『共栄報』の指導も対象として，ジャワ新聞会，ジャワ新聞社，そして軍報道班等と協議し，日本に不都合な記事をチェックしたり，必要とする新聞記事を記載したりすることが仕事であった [43]。

宣伝班が創刊した日刊紙『アシア・ラヤ』もジャワ新聞社に併合されていたが，創刊に中心的役割を果たした徴用作家富沢有為雄はすでに帰還していた [44]。創刊当時の編集顧問であったスカルジョ・ウィルノプラノト（Sukardjo Wirnopranoto, 1903–1962）が実権を握り，やはり創刊当時からインドネシア語の通訳・翻訳を行っていた中谷義男（1914–1972）はジャワ新聞社員となっていた。スカルジョの下で記者をしていたロシハン・アンワル（Rosihan Anwar, 1922–2011）は，日本人で信頼できたのは中谷であったと述べている。また彼は，軍検閲班による検閲の厳しさに閉口した [45]。ジャワ新聞会の指導員の影響力よりも，検閲を行っていた軍検閲班による干渉の方が強かった。

野村秀雄は，1927 年のジュネーブ軍縮会議に特派されたことはあったが，それ以外の海外勤務の経験はなく，ジャカルタ赴任は気が向かなかった [46]。謹厳実直な性格であったが，近衛内閣時の 1938 年 1 月 23 日に国家総動員法案が提出されると，当時朝日新聞東京本社の編集局次長であった野村秀雄は反対運動の先頭に立った。国家権力の巨大化に危惧を抱いていた [47]。また，1943 年 5 月にジャワに赴任してからは，「日本人のことばかりでなく，インドネシア人の色々な動きを取材してインドネシアの民情を紙面に反映させるように」とよく部下の記者に注意をした [48]。一方，軍部との関係にも心を配ったが，スマランの憲兵隊長が朝日新聞社へのジャワ新聞の委嘱を，委嘱ではなく命令だ等と

[41] ジャワ新聞社，前掲書，p. 178.
[42] 萩森健一，前掲文書，p. 84.
[43] 同文書，pp. 27–28.
[44]『アシア・ラヤ』の創刊については，次を参照。
姫本由美子「日本占領下インドネシアで語られた『大東亜共栄圏文化』の理念：日刊紙「アシア・ラヤ」上の日本徴用文化人と現地作家の論説を中心に」『21 世紀海域学の創成　―「南洋」から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ』立教大学アジア地域研究所，2015 年 7 月．https://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/CAAS/kaiiki/2/55.pdf
[45] ロシハン・アンワルへのインタビュー（2010 年 5 月 16 日，ジャカルタにて）
[46] 萩森健一，前掲文書，p. 39.
[47] 朝日新聞百年史編集委員会編，前掲書，pp. 497–498.
[48] 萩森健一，前掲文書，p. 36.

しつこく絡んだときは，その憲兵隊長ののどを締め上げて怒りを爆発させたことがあった[49]。このように，野村秀雄は，ジャワ新聞社の社長として軍部に媚びることなく，まじめに仕事に取り組んでいたといえよう。

野村秀雄は赴任中にジャワ新聞社を大きく改組する仕事を行った。それは，ジャワ新聞社と朝日新聞社ジャカルタ総局を統合したことである。1942 年 10 月の朝日新聞社によるジャワ新聞社設立は，前述の 1942 年 9 月に起案された「中央新聞統制案」に基づいてなされた。同案では，ジャワ新聞社（決定時点では，当時の新聞名から「うなばら」社）は朝日新聞社本社および総局とは全く関係を持たない独立した経営形態とすることとなっていた。軍は当初，ジャワ新聞社を強い統制下に置くため，朝日新聞社からは完全に独立した組織とした。ジャカルタに置かれた朝日新聞社の総局長であった坪田耕吉，次の阪本静一も統合には反対であった。一方は朝日新聞社ジャカルタ総局の局長，もう一方もジャワ新聞社社長とはいえ同じ新聞社からの出向者であったが，ジャカルタ総局としては，「御用新聞」社と捉えかねないジャワ新聞社と統合することには抵抗があったのであろう。しかし，1943 年 10 月に徳田修（1909–1973）が取材部次長としてジャワ新聞社に赴任し，ジャカルタ支局長も兼任することになった。それによってジャワ新聞社と本社のジャカルタ支局は統合された[50]。軍部も，軍検閲班による検閲体制の強化や，ジャワ新聞会の設立等によって，ジャワにおける日本の新聞社に対する統制がすでに整っていたことから，統合を承認したのであろう。

一方，ジャワ新聞社側は，初代社長の鈴木文四郎，そして次の野村秀雄社長とも統合には初めから前向きであった。異なる組織としてそれぞれが取材活動等を行うことは，両者の活動に重複する部分が多く，統合されている場合と比較して倍の労力と費用がかかることとなった。また，本社との連絡などの関係においても複雑さが増加した[51]。合理性，効率性を追求しての統合であった。野村は真面目であったがゆえに，経営者としての効率性を優先させてしまったのではないだろうか。

その結果，朝日新聞社総局がジャワ新聞社に吸収される形となった。朝日新聞社ジャカルタ支局が軍から委託を受けているジャワ新聞社を吸収することはあり得なかった。また，鈴木も野村も本社の取締りの地位にあり，ジャカルタ総局長の坪田や坂本よりも職階が上であった[52]。ジャワ新聞社とジャカルタ支局とが統合されれば，ジャワ新聞社社長が経営責任者となることは明らかであった。

野村秀雄社長の跡を継いで，朝日新聞社東京本社の重役待遇の地位にあった東口真平（1889–1945）が 1944 年 6 月にジャワ新聞社社長に就任し，彼がシンガポール出張中の飛行機事故で殉職後，ジャワ新聞社の編集局長であった益田豊彦（1900–1974）が 1945 年 7 月に社長を引き継ぎ，ジャワ新聞社はその後，大きな組織改編もなく敗戦を迎えた。

（5）インドネシアのその他の地域での新聞報道

ボルネオ，セレベス（スラウェシ），セラム地域は，海軍主担任地域の占領に続き，1942 年 1 月 11 日制定の「海軍民政部規定」により 3 月 10 日付で各地域に，民政部が設置された。さらに同地域

---

[49] 同文書，pp. 42–45.
[50] 同文書，pp. 48–49.
[51] 同文書，p. 49.
[52] 坪田耕吉は，神戸支局次長からジャカルタ総局長となった。阪本静一は，ジャカルタから帰任後，京都支局長となった。

を指揮下に置いた第三南遣艦隊を含めた南西方面艦隊の新設にともない，4 月 27 日には各民政府を隷属させる南西方面艦隊海軍民政政府が開設された [53]。

これらの地域では，ジャワやスマトラと比較して，それ以前に刊行されていた現地新聞の種類は少なかった。海軍には陸軍の宣伝班にあたる報道班が存在し戦況の情報提供を行っていたが，永久確保，植民地化を念頭に置いた政策を展開し，陸軍宣伝班のように積極的に現地での新聞刊行は行っていなかった。1942 年 11 月 12 日付けで海軍大臣より朝日新聞社に南ボルネオ地域における新聞事業経営の委託があった。また，12 月 8 日には「南方海軍軍政地域新聞政策要領」が発表され，セレベスは毎日新聞社，セラム地域は読売新聞社が現地における新聞の経営・発行を担当することとなり，アンボンに拠点を置いた [54]。しかし，治安の悪化からセラム地域の軍政監部が小スンダに移動してからは，バリ島のシガラジャに支局を置いた。

さて，朝日新聞社は直ちにボルネオに人員を派遣した。最初の派遣隊は 6 名と大変小規模であったが [55]，バンジャルマシンにボルネオ新聞社を設立後，12 月 8 日の『ボルネオ新聞』創刊時には 30 名を超える陣容となっていた [56]。海軍が他地域に委託した新聞と合わせて，「それらが，…大東亜戦争一周年を記念するにふさわしい文化建設事業と見るべく国際的思想戦の一翼を負うて東亜共栄圏の建設完遂に貢献する南方諸地域の強き推進力としてその発展成長が期待される」と同日の朝日新聞は紹介している。そして，1943 年 4 月にはボルネオ東部のバリクパパンに，8 月にはポンチアナクに支社を設立し，「東部版」と「西部版」の刊行を開始した。各版とも日本語とマレー（インドネシア）語のものを作ったが，軍，民政部，民間会社など在住の日本人が多く，日本語版は 5,000 部程度印刷した。マレー語版は 500 部ほどしか売れなかった。また，1944 年代に入ると，新聞用紙が不足しだし，ジャワのジャワ新聞社が融通してくれる話が出たが，陸軍軍政地区のジャワから海軍民政地区の南ボルネオに資材を持ち出すことは論外とされ，できなかった [57]。

英領であった北ボルネオは，マレー攻略部隊陸軍第 25 軍が 1941 年 12 月中旬に上陸し，2 ケ月足らずで全島を占領した。その後，陸軍の南方軍が直接統治したが，1942 年 4 月 10 日ボルネオ守備軍が編成されて南方軍に編入され，同守備軍の中に軍政部が置かれた。1942 年 5 月に軍に報道班（1943 年 4 月に宣伝部に昇格）を設置し，日本向けニュースの検閲，現地新聞の指導を行った [58]。また，北ボルネオは同盟通信社およびその他の提携新聞社が現地占領軍の管理下，新聞社を設立し経営することとなった。そこで同盟通信社はクチンに支局を開設したが，朝日新聞社をはじめその他の日本の新聞社は支局を置かなかった。

前述したように，同じく海軍民政府が設立されたセレベス地区は毎日新聞社，セラム地区は読売新聞社が新聞経営を担当した。しかし朝日新聞社も，セレベスのマカッサルとメナドに支局を置いた。この 2 支局は，同社がボルネオ新聞社を設立後，その支局となった。

スマトラについては，陸軍第 25 軍近衛師団が北半を，陸軍第 16 軍第 38 師団が南半を 3 月下旬ま

---

[53] 秦郁彦編『南方軍政の機構，監部軍政監一覧』南方軍政史研究フォーラム，1998 年，p. 49.（非売品）
[54] 早瀬晋三「日本占領・勢力下の東南アジアで発行された新聞」『アジア太平洋討究』27 号，2016 年 10 月，p. 68.
[55] 萩森健一，前掲文書，p. 111.
[56]『朝日新聞』1942 年 12 月 8 日東京版　朝刊.
[57] 萩森健一，前掲文書，p. 130.
[58] 同盟通信社，前掲書，p. 74.

でに占領した。その後全島が第 25 軍の作戦地域に編入され，3 月 20 日にイギリスの植民地であったマレーと共に同軍軍政部の指揮下に置かれ軍政が施行された。7 月には第 25 軍に編成された軍政監部に入った。さらに，翌年 3 月第 25 軍司令部がスマトラのブキティンギに移駐したのに伴い，軍政監部も付随して移転した。それを受けマレーにも馬来軍政監部が設置され，占領統治が二分された[59]。陸軍第 25 軍にも，ジャワを占領した第 16 軍と同様の宣伝班があり，占領初期には，スマトラでも報道業務に携わった。1942 年 9 月 16 に日本内地の陸軍報道部が「南方占領地域ニ於オケル通信社及ビ新聞工作処理要領」を決定したことは前述したが，マレー，昭南島（シンガポール），スマトラ，北ボルネオは同盟通信社およびその他の提携新聞社が現地占領軍の管理下，新聞社を設立し経営することとされた。そのため同盟通信社は，昭南に南方総局を置き，さらに昭南支社をおいた。昭南支社はマレーのペナン，クアラルンプールの各支局を，その他の各通信部，そしてスマトラのメダン，ブキティンギ，パレンバン，パダンの各支局を統括した。

日本の新聞社では，朝日，毎日，読売，東京，日本産業経済，西部日本，中部日本，北海道新聞が昭南に総局・支局を置き，朝日，毎日は，ペナン，クアラ・ルンプールのほかに，スマトラのブキティンギとメダンに支局を置いた[60]。当時の『朝日新聞』には，日本占領期のスマトラの記事も登場する。スマトラ攻略においては，朝日新聞の特派員がパレンバンの落下傘部隊の写真撮影を行っている。さらに，陸軍第 16 軍がジャワ占領とともに，スマトラ南半の占領にあたった時には，朝日新聞の特派員も従軍した。その後にスマトラで活動した特派員名は『朝日新聞』の記事にも記されているが，ブキティンギおよびメダン支局の特派員と思われる。同支局は昭南の総局の管轄下にあったが，現時点では朝日新聞社のスマトラ支局の活動の実態は明らかになっていない。

（6）政府・軍部による報道統制

所蔵写真の検討に入る前に，戦時報道，特に写真報道の統制について簡単に触れておきたい。

日本の新聞社が従軍写真師を派遣したのは「二六新報」（1893–1940）による日清戦争（1894–1895）が最初であるとされる[61]。しかし当時，カメラなどの機材が十分発達していなかったため，民間の写真師は数名に過ぎず，写真師の中核は軍事利用を目的として編成された陸軍参謀本部陸地測量部の写真班員であった。

それと同時に，それらの写真師によって撮影された戦争写真に対しては，①軍が雇用した写真班員による撮影写真の利用は軍の許可を必要とする，②外交・軍事に関する事件を新聞，雑誌等に掲載するときは，内務大臣の事前検閲を受けなければならない（1894 年 8 月 1 日勅令 134 号），そして③大本営が規定した「新聞記者従軍規則」により取材の厳重な取り締まりが行われるようになった。それが，その後の戦争報道の取り締まり制度の原型となった[62]。

報道写真の新聞紙面への最初の登場は 1904 年 1 月 1 日の報知新聞の日露戦争の写真といわれているが，その後の改良カメラと高性能のグラビア印刷機の輸入によって，ニュースを受け取る読者の

---

[59] 秦郁彦編，前掲書，p. 24.
[60] 同盟通信社，前掲書，p. 13.
[61] 日本写真協会『日本写真史 1840–1945』平凡社，1971 年，p. 382.
[62] 同書，pp. 447–448.

ニーズにこたえるためにさまざまな形で報道写真は利用されていった。その一方で，2 回の改訂を経て 1909 年 5 月 6 日法 41 号の新聞紙法や 1893 年 4 月 14 日法 15 号の出版法によって，出版物の規制が強化される。そこでは，安寧秩序を乱しまたは風俗を害すると認めるときは，内務大臣が一方的に出版物の発売頒布を禁止できること，軍事・外交事項について，陸海両大臣・外務大臣，そして検事も掲載禁止命令権を所有することなどが定められ，報道統制に伴い報道写真の掲載も規制が強められていった。

さらに，社会主義や共産主義，それに伴う労働運動などを取り締まることになる 1925 年の治安維持法が制定され，日中戦争が始まると 1938 年に国家総動員法が制定され，政府は国防目的達成のため国の戦力を最も有効に発揮できるように人的物的資源を統制有用できることになった。朝日新聞社の野村秀雄が制定の動きに対して反対運動を起こした法律である。さらに，国民の精神統制，すなわち文化統制を強化するために，旧来の内務省（警察）による取り締まりではなく，政府全体による取り締りの重要性が認識された。1936 年に情報委員会が設立され，それが翌年内閣情報部へ，そして 1940 年設立の情報局へと発展した。同局は，陸軍省情報部，海軍省軍事普及部，外務省情報部，内務省警保局図書（検閲）課の事務を統合し，情報の規制だけでなく，『写真週報』や『フロント』などの国内・海外向け出版物の制作をジャーナリスト，カメラマン，そして新聞社等に委託し，情報の宣伝を行った。また同年に大本営が設置され , 大本営の窓口機関の役割も果たした [63]。

報道事業の統制・物資統制を行うための法令も制定され，統制強化のために 1940 年 5 月に内閣新聞雑誌用紙統制委員会が設置され，紙，フィルムなどの出版・印刷に不可欠な資材の割り当て・配給を行った。この委員には，陸・海軍報道部の検閲担当者も就任し，新聞社・出版社に対して強い影響力を持った [64]。

以上に示されるように，日本政府は戦争を行うにあたって，その準備段階から戦争報道に対して統制を行うための法整備や組織の立ち上げを行った。その対象は，戦争報道の中核を担う新聞だけでなく，『改造』や『中央公論』などの論壇の場を提供した出版社の雑誌や，新聞社が新聞報道を行うにあたって取得した情報をより主観的に編集して刊行した図書や雑誌も対象となった。その一方で，外部に出版物の制作を委託し，情報の宣伝も行った。そこに朝日新聞出版局が入り込んでいった。

一方，インドネシアでは，ジャワをはじめ陸軍占領地区では，宣伝班内の報道担当者が検閲を担当した。早期に治安が安定したジャワでの検閲は，検閲基準が班員によって統一されていなかったこともあり，他の地域と比較して厳しくなかった。しかし検閲が行われたことは確かで，当時朝日新聞社ジャカルタ総局の特派員であった武野武治が明らかにしているように，検閲官の目を盗んで，東京本社に軍批判の材料となる記事を送り，問題視されたこともあった [65]。その後，1943 年 4 月に検閲業務は，司令官直属の軍検閲班に移管される [66]。また，前述したように，軍部はジャワ新聞会の設立を主導し，日本の新聞社だけでなく現地の新聞社への統制も強化していった。

---

[63] 平櫛孝『大本営報道部』図書出版社，1980 年，p. 12.
[64] 同書，pp. 453–454.
[65] むのたけじ，前掲書，pp. 51–53.
[66] ジャワ新聞社，前掲書，p. 166.

2. 朝日新聞社所蔵写真の概要

冒頭で記したように，日本占領下のインドネシアに関連した写真等 1,200 枚以上が朝日新聞大阪本社に保管されている。それらは，1931 年の満州事変の前後から第 2 次世界大戦敗戦までの時代にアジア各地で主に朝日新聞特派員によって撮影されたり，収集されたりした写真 7 万点以上の一部である。朝日新聞東京本社やほかの主要新聞社・通信社に所蔵されていた同種の写真の多くが敗戦で焼却処分されたが，大阪本社のものは，疎開していたため焼却を免れた。その経緯は，『朝日新聞の秘蔵写真が語る戦争[67]』が紹介している。

本章では，この所蔵写真の中から日本がインドネシアを占領する以前の 1930 年代から日本の敗戦の 1945 年までのインドネシアに関連した写真等 1,200 点余りを手掛かりに，前章で明らかにした「大東亜戦争」期に朝日新聞社がジャワとボルネオを中心として行った活動を念頭に置いて，戦時における報道の実態を明らかにしたい。第 1 に，所蔵写真を年代，地域別に整理して，その特徴を明らかにする。第 2 に，それらの写真が誰によっていつ撮影されたかを整理して，その特徴を示す。

(1) 年代・地域別点数

所蔵写真の保管ボックスの中でも，インドネシアに関連したものは，4 つのボックスに収められている。その写真の総数は，1,262 点である。インドネシアの中でも，ジャワ，ボルネオ，セレベス（スラウェシ）の 3 地域のものが多い。その他の地域のものは同ボックスの中に 15 点あるが，インドネシアのものはスマトラが 8 点，スンバワとニューギニア（蘭領）が各 1 点である。それらを地域別，年代別に整理したものが次の表 3 である。

表 3. 朝日新聞社所蔵写真インドネシアの地域別・年代別点数

	ジャワ	セレベス	ボルネオ	その他	合計
1927	5				5
1928					
1929		1	1		2
1930					
1931	6				6
1932	2				2
1933	17	14	126	2	159
1934	33				33
1935	8				8
1936	26	4			30
1937	7	8		3	18
1938	1				1
1939	2	1	4		7
1940	48	2	2	2	54
1941	23	2	20	1	46
1942	443	22	73	5	543
1943	56	32	68		156
1944	15	4	19		38
1953			1		1
1955	3				3
1957	4				4
不明	123	6	15	2	146
合計	822	96	329	15	1262

所蔵写真リストから筆者が作成

[67] 朝日新聞社「写真が語る戦争」取材班『朝日新聞の秘蔵写真が語る戦争』朝日新聞出版，2009 年.

前章で明らかにしたように，日本軍が東南アジアを占領後，朝日新聞社は陸軍および海軍から委託を受けて，ジャワ新聞社とボルネオ新聞社を設立して，現地での新聞経営にあたった。両地域の戦中の写真点数の多さが，そのことを物語っている。ただし 1942 年のジャワ関連の写真等 433 枚のうち 300 点あまりは，ジャワへの侵攻以前の 3 月までに収集された絵葉書を含む写真資料である。開戦直前に，参考資料として絵葉書などの写真資料が大量に収集された状況がうかがえる。

また，セラム地域は戦局が厳しく，海軍から新聞経営を委託された読売新聞でさえ十分な活動ができなかったことを考えると写真がほとんどないことは不自然ではない。またスマトラに関しては，同盟通信社の管轄とはいえ朝日新聞社が支局を置いていたにもかかわらず写真点数が少ない理由はわからない。新聞掲載後，写真部に返却されなかったこともあったが，その点は他の地域も同じである。

さらに，戦況の悪化によって資材の不足や通信網の寸断によって本社への写真送付が困難さを増し，1944 年後半以降の写真点数は大幅に減少し，1945 年のものは所蔵されていない。

(2) 撮影者別写真点数

所蔵写真の裏書には，撮影者の肩書，氏名，撮影日が記入されているものが 274 点存在する。それらを地域，年代，肩書・氏名等で整理すると次頁の表 4 となる。

撮影者に関する何らかの情報が記入されている写真は，ボルネオの 1944 年を例外として，1942 年と 1943 年に集中している。前章で明らかにしたように，日本占領期の朝日新聞社の特派員は，大まかに 3 種類に分類できる。①インドネシアに開設された本社の総局（支局）に派遣された特派員，②軍に徴用されてその報道班員として派遣されたもの，③軍の委託を受けて設置されたジャワ新聞社とボルネオ新聞社に出向した特派員である。

ジャワでは，1942 年においては①の特派員によって撮影された写真が圧倒的に多い。しかし，1943 年後半以降は，「朝日特派員」などの肩書のみで，氏名のない写真が増えていく。これらの「朝日特派員」の多くは，1943 年 10 月にジャワ新聞社へ朝日新聞社支局が統合され，①と③とが一緒になった特派員であると考えられる。また，1943 年 4 月以降，検閲が宣伝班から軍検閲班に移管され，厳しくなったことも影響していると考えられる。

ボルネオでも，やはり 1942 年においては①の特派員による撮影が多い。1943 年にも①の特派員による撮影写真もあるが，②の海軍に報道班員として徴用された特派員が増加していく。ボルネオでは，ジャワと同様，朝日新聞社支局に加えてボルネオ新聞社が設立された。その両者はやはりジャワと同様に統合された。しかしボルネオでは，朝日新聞社から海軍に徴用された報道班員が撮影した写真が多い。ジャワと比較して，地理や戦局の観点から，移動や身の安全を確保するうえで海軍に従軍する報道班員の身分で取材・写真撮影を行ったためである。したがって，ジャワにおける支局とジャワ新聞社との統合に比べて，同様の統合には抵抗感が初めから小さかったと考えられる。

セレベスについては，朝日新聞社の支局はマカッサルとメナドにあった。しかし，海軍に新聞経営を委託されたのは毎日新聞社であり，朝日新聞社の支局はボルネオ新聞社の設立に伴いその傘下に入った。また，海軍に徴用されて海軍報道班員として取材・写真撮影の多くが行われたことが分かる。さらに，1943 年以降は同盟の特派員や海軍報道班員によって撮影された写真が増加していった。

表 4. 撮影者別写真点数

撮影場所	氏名	撮影点数						
		1940	1941	1942	1943	1944	不明	合計
ジャワ	谷口	2						2
	衣奈特派員	18	2					20
	米谷特派員			5				5
	友松特派員			11				11
	林特派員			2				2
	岩津特派員			37	7			44
	十河特派員			1				1
	風田川特派員			15	3		2	20
	坪田特派員			4				4
	宮間特派員(海軍)*			1				1
	丸山特派員				1		1	2
	有川特派員				2			2
	前田特派員(同盟)			1				1
	朝日特派員			3	18	7		28
	ジャワ新聞写真課					2		2
	武田特派員(1957年)						3	3
	同盟写真		1	9	1		2	13
セレベス	橋本特派員(海軍)			1				1
	小川特派員(海軍)			3				3
	大岩氏			2				2
	斉藤(良)(海軍)			1				1
	原田特派員				10			10
	内本海軍報道班員(同盟)			1				1
	太田海軍報道班員(同盟)				3			3
	芦部特派員(同盟)				5	1		6
	同盟特派員				3			3
	同盟写真(特派員名なし)				5			5
ボルネオ	戸井田豊氏		1					1
	宮内特派員(海軍)			2				2
	金井特派員			6				6
	神谷特派員			5				5
	川原			1				1
	源関海軍報道班員(同盟)			2				2
	長谷川特派員(海軍)			1				1
	吉田特派員(パレンバン)				1			1
	青井特派員(海軍)			1				1
	上野特派員(海軍)~~(海軍)~~				21			21
	真船海軍報道班員				2			2
	上田特派員				5			5
	奈良特派員				3			3
	■■特派員, 特派員				1	2		3
	本社報道班員, 特派員(報道班員)			1	2	5		8
	小久保特派員					3		3
	斉藤貞雄(陸軍報道班員)					1		1
	坪内特派員					6		6
	同盟写真(特派員名なし)				4	1		5
スンバワ	小川特派員(海軍)			1				1
合計		20	4	116	98	28	8	274

*(海軍)は海軍報道班員を意味する。　　所蔵写真リストに基づいて筆者が作成

3. 期間別写真の特徴

本章では，前章で明らかにした所蔵写真の特徴を参考にして，それらの写真がどのように『朝日新聞』で利用されたのかを示す。所蔵写真を（1）戦前，（2）侵攻直前，（3）占領期に分類して，その特徴を明らかにしたい。

（1） 戦前

戦前については，1933 年の写真点数，特にボルネオのものが突出している。これは，南洋が日本製品の市場として，また水産業の拠点地として重要性を増してきたのに伴い，朝日新聞社の特派員が同年に派遣されたときに，撮影したり，写真資料として収集したりしたものと思われる [68]。特に，ボルネオでは 1933 年は，ボルネオ水産会社が設立された年であり，日本人社会が同地で発展していく契機となった年である。同地の水産業，油田，日本人社会，ボルネオの少数民族ダヤックの生活が被写体となった写真が多くみられる。この時の特派員は，ジャワやセレベスも訪れている。実際，朝日新聞に掲載されたものがある。

ジャワでは，翌年の 1934 年から 36 年，そして 1940 年の点数が多くなっている。これは 1934 年 6 月 8 日から 12 月 21 日まで，そして一時中断したのち 1936 年 6 月 8 日から 37 年の 4 月 9 日まで開催された第 1 次日蘭会商，そして 1940 年 9 月 13 日から 41 年 6 月 7 日まで開催された第 2 次日蘭会商の時期と重なる。特に，第 2 次日蘭会商時には，朝日新聞社から衣奈多喜男特派員（1911–1988）が派遣され [69]，所蔵写真にも同時期の衣奈特派員撮影の写真が 20 点存在している。それらの中には，日蘭会商の交渉会議場となった建物の外観を撮影した写真はあるが，会議の様子そのものを写したものはない。バタビヤ（ジャカルタ）中心街の運河で洗濯をし，マンディ（水浴）をする人々の様子，ジャワの農村の稲刈りの様子など同地の人々の日常生活を撮影したもの，日本人会の運動会の写真もある。これらの写真 3 点は，『朝日新聞』でも掲載された [70]。

戦前，朝日新聞社の東南アジアでの常置特派員はバンコクのみであったと思われる。特派員が派遣されたのは，前述のように政治や経済の動きに合わせたものとなっている。しかし，所蔵写真を見るとそこに派遣された特派員たちは，その地域に必ずしも精通していたわけではないが，政治・経済の動きを写真に収めるだけでなく，事前にそれらの地域の情報を収集したうえで，人々の暮らしや社会にも目を向けていた様子がうかがわれる。そして，それらの写真の裏書には，検閲を受けた形跡はない。

（2）侵攻直前

日本軍の東南アジアへの侵攻は，1941 年 12 月 8 日未明のマレー半島上陸から始まった。インドネシア（オランダ領東インド）の占領は，1942 年初頭のセレベスとボルネオ，3 月上旬のジャワ，3 月下旬のスマトラ，と各地の全領土を制圧した時期はずれたが，開戦から 1942 年 3 月末までに，朝日新聞社の写真部や調査部には大量の絵葉書や写真資料が集められた。

前述したように，1942 年のジャワ関連の写真等は，433 枚のうち 300 点あまりが 3 月までに収集された絵葉書を含む写真資料である。被写体は，オランダ領東インドの総督府や陸軍省などの官庁，鉄道や駅舎，港湾や飛行場などの交通・運輸の要，郵便局や通信局，そしてホテルや市街地，さらに観光名所や景勝地におよぶ。

---

[68]『朝日新聞』1933 年 8 月 18 日東京版　朝刊.

[69]『朝日新聞』1940 年 9 月 4 日東京版　朝刊，等.

[70]『朝日新聞』1940 年 10 月 16 日東京版　朝刊（所蔵写真番号 061705），1940 年 11 月 15 日大阪版　朝刊（所蔵写真番号 061400），11 月 14 日大阪版　朝刊（所蔵写真番号 061404）.

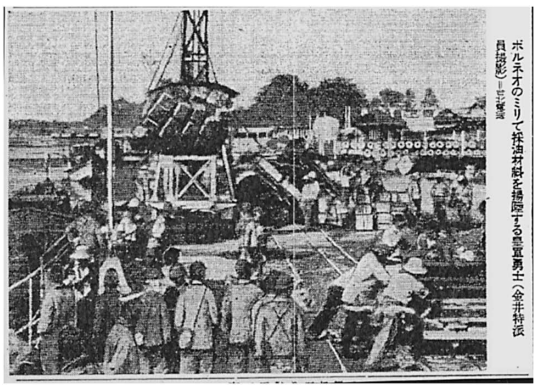
ボルネオでも 1941 年の写真資料点数 20 点のうち 12 月の受領印がついたものが 12 点，そして 1942 年の写真・写真資料 73 点のうち 40 点近くが写真資料である。ボルネオの政庁，送電鉄塔，油田やゴム産業に関連したもの，港湾，同地の人々の生活風景やダヤック族などの写真資料である。

このような写真資料は，インドネシアへ従軍する特派員にとってのガイドブックの役目を果たしたと考えられるし，また実際に新聞記事の補助情報として新聞に掲載された。その具体例については，次の占領期の特徴の節で示す。

（3）占領期

インドネシアの中で最も早く日本軍が占領した地域は，ボルネオである。所蔵写真の中で占領後の朝日新聞社特派員によって最も早く撮影された写真は，撮影日が 1942 年 1 月 11 日のボルネオのミリーで金井大治特派員（1913 年生）が撮影した写真である。その裏書には，「大東亜戦争ボルネオ戦線　ミリーへ採油材料を揚陸する○○部隊」とある。東南アジアへの侵攻目的が石油の獲得であったことを象徴する写真である。『朝日新聞』大阪版の 1942 年 2 月 6 日の夕刊に掲載された。

写真 1[71]



ボルネオに関するそれ以前の日付のスタンプが押された所蔵写真と異なる点は，写真の裏書に「現地検閲済」と「手続不要」という判が押されていることである。戦争による検閲が始まったことを示している。「現地検閲済」はボルネオでの海軍報道班による検閲を通ったこと，そして「手続不要」とあるのは，写真が軍の作戦に影響を与えるものではないので日本の海軍省報道部の検閲手続きをとる必要はない，と朝日新聞本社が判断したことを意味している。

続いてセレベスの占領が続いた。『朝日新聞』では，1942 年 2 月 16 日の大阪版に，メナドの落下傘部隊の写真が掲載された。これは，海軍報道班員が撮影したもので，海軍省許可済の判が押されている。所蔵写真のなかで一番早く撮影された写真は，海軍報道班員として徴用されていた橋本貞特派員（1909 年生）が撮影したセレベス島のワワトビの王による海軍○○部隊の歓迎会の様子を写したものである[72]。この写真は，友松進特派員（1915 年生）が 3 月 14 日と 16 日に撮影したジャワのジョクジャカルタとソロの王様が日本の占領を歓迎している写真と一緒に掲載された。

---

[71] 所蔵写真番号　063602.
[72] 所蔵写真番号　061237.

写真 2[73]



皇軍を迎え喜びの王様三人　㊤セレベス島ワワトビのラサンダラ王が我が海軍部隊の入場祝う盛んな歓迎会（トルコ帽の人が王様・その左が岡村少佐）　㊦㊧上機嫌のジャバのソロ王（熊本本社特派員と会見していることろ）　㊦㊨ジョクヤカルタ王、わが勇士と交歓　㊤橋本特派員（海軍報道班員）撮影（海軍省許可済第 569 号）　㊦友松特派員撮影

この 3 枚の写真は，インドネシアの権威である王様たちが日本軍を歓迎していることを示すために撮影されたと考えられ，3 月 26 日の『朝日新聞』大阪版の夕刊に掲載された。セレベスの写真は「現地検閲済」のほか「海軍省許可済第五九六号」の判が押されている。ジャワでは，「現地検閲済」と「手続不要」の判が押されている。

ジャワに関しては，この 3 月 26 日の記事の前に，約 20 点余りの写真付き記事が掲載された。最初は，2 月 7 日の東京版に，「海鷲又も赫々の偉業　米蘭聯合艦隊壊滅す」大東亜海を制圧するわが海軍航空部隊」の見出し記事と写真である。戦況を伝える大本営による発表と海軍省提供の写真であった。同様の写真掲載が続き，3 月 7 日には「上陸僅か五日，精鋭猛進　ジャバ島の死命制す　蘭印首都バタビヤ完全占領」という見出しで，皇軍の完全占領下バタビア市街（ハルモニ地区）と題した写真が掲載された。この写真は，撮影者や撮影日が示されていないが，所蔵写真のなかに存在する。ジャワの占領直前の 1942 年 1 月の受領印が押された一連の写真資料の一点である。

写真 3[74]



占領以前に収集した写真資料を使って，あたかも占領時に撮影した写真のように利用してあるものは，これだけではない。次は，絵葉書であるのに，日本軍艦入港の写真として紹介されたものである。

占領前に収集された写真資料の一点であるスラバヤ港の絵葉書が，『朝日新聞』1942 年 3 月 31 日の東京版に掲載された。この写真の撮影者は記されていないが，使用したのは海軍に徴用されて海軍

[73] 所蔵写真番号　061236，061234.
[74] 所蔵写真番号　061770.

報道班員として活動していた朝日新聞社の特派員である。

写真 4[75]



1942 年 3 月 31 日東京版　夕刊
「スラバヤ軍港初の軍艦旗」　スラバヤ軍港〇〇艦上にて斉藤（良）特派員（海軍報道班員）21 日発
写真はわが艦隊入港のスラバヤ港

戦況の写真は，新聞社特派員が撮影することは容易でない。陸軍省や海軍省提供のものが多い。そして出所が示されていないものは，絵葉書等が用いられている場合が多い。陸・海軍提供のものだけではなく，撮影者名がないものは，信憑性を疑ってみる必要があることを示す例であろう。一方，読者へのサービスとしてこの程度の写真の流用は許されるのではないか，といった意見もあろう。個々人の判断が分かれるところである。

さて，撮影者が明記されているジャワに関連した所蔵写真は，3 月 19 日の『朝日新聞』大阪版に掲載された同月 6 日に米谷穎太郎特派員（1916 年生）によって撮影された写真 5 が最初である。3 月 26 日掲載の写真 2 と合わせると，インドネシアの王様も一般民衆も日本軍を歓迎している様子を報道したことになる。ただし，日本侵攻直後のジャカルタの様子を描写した研究書や徴用作家のエッセイには，民衆が日の丸の旗を持って歓迎したと記されている。しかし，この写真 5 には日の丸が見当たらない。日本侵攻直後を撮影した他の地域の写真では，日の丸がわざとらしく掲げられているものが多いことを考えると，撮影者の良心が感じられる。ジャワでの検閲も占領初期は厳しくなかったともいえる。

写真 5



1942 年 3 月 19 日大阪版　朝刊
「バタビヤ入場　第一報」　㊦バタビヤ市民、皇軍を迎えて歓呼　6 日　米谷特派員撮影　＝台北無線伝送

しかし，この写真は所蔵写真の中には含まれていない。掲載後，写真部に返却されなかったか，東京の本社等に送られたのかもしれない。このように，所蔵写真は『朝日新聞』等に掲載された特派員が撮影したインドネシア関連の写真すべてを網羅しているわけではない。しかし，『朝日新聞』には，日本軍がインドネア侵攻・占領後，次々と実施した政策を正当化した記事が写真とともに掲載され，その多くが所蔵写真の中に含まれている。

[75]『朝日新聞』1942 年 3 月 31 日東京版　夕刊（所蔵写真番号　061616）.

日本占領下インドネシア社会について，写真を用いて紹介した写真集等はすでにある[76]。したがって，ここでは詳しく扱わない。『朝日新聞』の写真付きジャワ関連の記事の見出しの代表的なものとして次のような見出しが用いられた。「皇軍を迎えて歓呼するバタビア市民」「南の油田蘇る」「富士山型のスメル山」「育てます・ヨイコを」「新生ジャバ」「ジャワの秘境」「総力建設のジャワ」「現地自活」「“緑の町”の日本色」「南を拓く科学」「郷土防衛に起上がったジャワ防衛義勇軍」等。

「育てます・ヨイコを」に代表される子供に対する教育は，ジャワだけでなく，他のインドネシアの地域，さらに大東亜共栄圏の次世代教育として日本が力を入れた政策である[77]。次の写真は，その一例であるが，丸山特派員撮影と明記されている。所蔵写真の中にこの写真はないが，丸山四郎特派員（1903–1977）が撮影した写真は所蔵写真の中に 2 点存在する。

写真 6



1943 年 3 月 9 日大阪版　朝刊
写真はジャカルタ女子教育養成所のお洗濯（丸山特派員撮影）

この丸山特派員は，ジャワ新聞社創設時から敗戦時まで新聞課長を務めた。ジャワ赴任当初は，自分が撮影した写真の裏書に撮影者として氏名を記していた。しかし，ジャワ新聞社と朝日新聞社ジャカルタ総局の統合の話が進むうちに，氏名の記入を避けるようになったのではないだろうか。ジャワに関連した所蔵写真のなかに「朝日特派員」および「ジャワ新聞課」と裏書された写真が合計 30 点存在するが，その中には丸山特派員が撮影した写真も当然含まれているはずである。所蔵写真の裏には，「特派員撮影」あるいは「ジャワ新聞写真課」の判が押されている。占領初期の写真には，「特派員撮影」の判の上に特派員名が記入されたが，1943 年後半から撮影者無記名のものが増えていった。撮影者がジャワ新聞社と朝日新聞社ジャカルタ総局の統合過程で，自身の所属先に対する混乱やネガティブな感情が生じてきた結果と考えられる。

1944 年には，戦況における日本の劣勢はより明らかとなっていき，インドネシア人による郷土防衛義勇軍の写真だけでなく，日本の状況も踏まえて，ジャワ在住の日本人が戦争に備える姿も紹介されるようになる。写真 7 の裏書には，氏名なしの「本社特派員撮影」とのみ書かれている。本社は同じでも，朝日新聞社支局員が属する本社なのかジャワ新聞社社員が属する本社なのか，分からない形

[76] 例えば，『写真記録　東南アジア　歴史・戦争・日本 2 インドネシア』（倉沢愛子編，ほるぷ出版，1997）.

[77]「大東亜建設ニ処する文教政策答申」（企画院・大東亜建設審議会編（復刻版，解題　明石陽至・石井均）『大東亜建設審議会関係資料―総会・部会・速記録―』第 1 巻，1995 年，p. 10.）. 同答申は，1943 年 6 月に政府に提出された .

となっている。このような表記で，両社統合後の自己のアイデンティティ・クライシスを回避していたのではないか。

写真 7[78]



1944 年 1 月 10 日大阪版　夕刊
「剣道に鍛えるジャワの日本娘」ジャカルタ軍政監部にて本社特派員撮影（陸軍省検閲済み）

一方，占領期初期のころには，特派員がより自由に，そして個人的な関心から撮影したと思われる写真も『朝日新聞』に掲載された。次の写真 8 では，右上の写真は，ジャワの火山である。インドネシアやフィリピンには日本の富士山に似た山が多く，東南アジアと日本の共通性を示すために撮影され，紹介された。先述の新聞記事の見出しの「富士山型のスメル山」がその例である。日本の「大東亜共栄圏」像の一つの特徴を示すものとして撮影されたといえよう。しかし，写真 8 を掲載した新聞記事を読むと，撮影者は朝日新聞社の社機あさなぎでスメル山を撮影しただけでなく，さらにスメル山に登頂している。その登山の様子は，『アサヒグラフ』でより詳細に報告されている[79]。この例などは，治安の比較的安定していたジャワでは，特派員の個人的趣味から写真が撮影され，それが新聞に掲載された場合もあったことを示している。

写真 8[80]



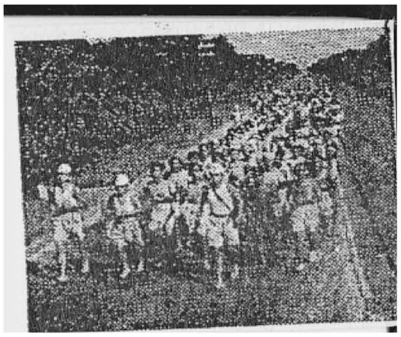
1942 年 7 月 22 日東京版　夕刊
「熱帯の火山スメル征服記　スラバヤで日吉・岩津特派員記」
（写真はスメル火山（本社あさなぎ機上より）と砂漠の処女地を踏んで進む一行）

なおボルネオに関しては，前述したように，占領期の後半になっても，掲載された写真の裏書には，特派員名が明記されていることが多かった。その背景は前述したが，次の写真がその例である。

---

[78] 所蔵写真番号　061195.
[79]『アサヒグラフ』975 号（1942 年 7 月 29 日），pp. 10–11.
[80] 右上の写真と同時期に撮影されたものが所蔵写真番号　061871.

写真 9[81]



1944 年 1 月 14 日大阪版　夕刊
バンジェルマシンにて本社特派員岡田丈夫記＝写真は原住民の青年長距離駆足訓練（海軍省許可済第五五号）
写真の裏書には、「18 年 10 月　上野特派員撮影」と記されている。

以上，『朝日新聞』に掲載されたジャワとボルネオに関連した写真の特徴を示した。

最後に，撮影者名が明記されないために，撮影者がその時期に実際にその場所にいたかどうか確認できないことに乗じて，不正に利用された事例を示す。

写真 10



1943 年 9 月 13 日東京版　朝刊
「伸びゆく大東亜　ジャワで巡回映画が大人気」
写真は大盛況の巡回映写場（ジャカルタ特電）

写真 11[82]



1944 年 5 月 5 日東京版　朝刊
「南方共栄圏に芽ぐむ新文化　ジャワ　まづ言語統制で啓蒙」
【上】ジャワ各地の巡回映画広告ポスターに集まる住民＝スバンにて（本社特派員撮影）

1943 年の『ジャワ・バル』17 号に，ジャワでの巡回映写会の紹介として写真 10 と 11 が掲載されている。写真 10 は所蔵写真にはないが，写真 11 は『ジャワ・バル』に掲載された巡回映写会のほかの写真数枚と一緒に所蔵写真の中にあり，それらの所蔵番号は連番となっている[83]。したがってこの 2 点は，写真 11 の裏書に記されている 1943 年 8 月 30 日に朝日新聞特派員が撮影したといえよう。写真 10 は，撮影約 2 週間後の 9 月 13 日の『朝日新聞』に掲載された。ところが，写真 11 は 8 ケ月余り後の翌年 5 月 5 日の『朝日新聞』に掲載された。果たして掲載時に写真と同じ光景が見られたか疑問である。新聞において報道写真を掲載する場合，先例と同様に撮影者と撮影日時を表示することの重要性を提起しているといえよう。

---

[81] 所蔵写真番号　063841.
[82] 所蔵写真番号　061197.
[83]『ジャワ・バル』（2603（1943），9. 1. 17 号，pp. 22–23）に掲載されたその他の写真の所蔵番号は，061198 と 061199 である。

4.『朝日新聞』,『アサヒグラフ』と『ジャワ・バル』の比較

これまで，所蔵写真の特徴を踏まえて，それらがどのように『朝日新聞』に掲載されてきたのかについて検討してきた。本章では，朝日新聞社が日本で発行したグラフ誌『アサヒグラフ』と陸軍の委託を受けてジャワで設立したジャワ新聞社が発行した『ジャワ・バル』，そして『朝日新聞』とを比較して，所蔵写真が日本および占領地ジャワで刊行されたグラフ誌で，どのように利用のされたのか，その特徴を明らかにしたい。

第 1 章では，『アサヒグラフ』と『ジャワ・バル』は開戦直前から朝日新聞出版局の局長鈴木文四郎の下，同一の編集長によって編集が行われたことを指摘した。『アサヒグラフ』は週刊，そして『ジャワ・バル』は月 2 回刊行されたが，毎日発行される新聞と比較すると，少し先の刊行を意識して編集が行われるため，編集者の意図が新聞と比較して，より明確に反映されたと考える。その点を踏まえて，次の 2 つの観点からこれら 2 グラフ誌と『朝日新聞』の比較を行いたい。

第 1 は，「大東亜共栄圏」像の紹介の仕方である。『朝日新聞』の場合，「大東亜共栄圏」像は，各々の地域が別個に取り上げられることが多い。例えば，前出の写真 10, 11 の映画上映の写真にしても，複数の地域を取り上げる場合でも，ジャワとフィリピンの 2 地域を一緒に紹介する程度である。それに対して，『アサヒグラフ』や『ジャワ・バル』では，ジャワ，タイ，フィリピン，ビルマなどより多くの地域を同時に取り上げ，あたかも一つの共栄圏で共に生活を営む人々の姿として紹介することができた。ジャワで発行された『ジャワ・バル』においてもその傾向がみられる。両者が同じ編集者によって編集されていたためと考えられるが，最大の理由は写真を用いたため，文章によるものよりも，容易に複数の地域を一緒に紹介できたからではないか，と考える。異なる言語を話す読者にとって，写真は言語の壁を乗り越えやすくする役割を果たすことができた。

写真 12



写真 13



写真 12 は，『アサヒグラフ』の 1001 号（1943 年 2 月 3 日）の見開き 1 ページ（8–9 ページ）である。掲載されている写真は，タイとジャワの 2 地域だけであるが，両地域の迎春の写真である。左側の上の写真の裏書には，（勅題「農村新年」に因んで）とある [84]。『アサヒグラフ』の編集者がその勅題を提示してインドネシア側とタイ側に撮影させた写真が掲載されたのであろう。『ジャワ・バル』の 2 号（1943 年 1 月 15 日）のジャワに関する写真 13 の 3 点は，『アサヒグラフ』の写真 13 の左ページ上と左下 2 点の写真とまったく同じである [85]。いずれにせよ，『ジャワ・バル』と『アサヒグラフ』が

[84] 所蔵写真番号　061249.
[85]『ジャワ・バル』 2603（1943）1.15, 2 号，pp. 16–17.

写真交換をしていたことの証左であり，また写真を組み合わせることによって，タイとジャワで新春を共に祝っている印象を読者に与えた。

写真 14



写真 15



1049 号（1944 年 1 月 5 日，12–13 ページ）の写真 14 は，さらにジャワ，フィリピン，昭南，スマトラ，ビルマの 5 地域の人々が新しいアジア建設に向かって働いている姿の写真を掲載している。「大東亜共栄圏」という言葉は使わず「アジア」を使っているが，アジアの地域の人々の一体感を表現しようとする編集意図が感じられる。写真 15 は，1099 号（1945 年 1 月，16–17 ページ）であるが，東南アジアだけでなく，満州や南洋諸島も一緒に紹介されている。戦局が日本にとって厳しさを増すなか，日本の帝国領土をより広大なものへみせる編集の意図は何であったのだろうか。

『ジャワ・バル』に掲載された写真はジャワと日本に関連したものが中心となっているが，ビルマなどの他のアジア地域を紹介することもあった[86]。『太陽』も含めて，写真によってアジア地域の人々の一体感を提示する意図が感じられ，また写真交換によってそれが可能になった。

第 2 の観点は，これも編集者の意図を色濃く示していると思われるが，『アサヒグラフ』や『ジャワ・バル』の方が，写真を用いてアジア地域の人々の主体性を強調していると考える。ジャワでは，オランダ植民地時代に作られた研究所の成果を引き継いで，マラリヤの薬を大量に生産し，東南アジア各地に配布した。それに関連した写真が掲載されているが，『朝日新聞』と『ジャワ・バル』では，次のような紹介のされ方がなされている。

[86] 例えば，『ジャワ・バル』 2603（1943）4.15. 8 号，pp. 22–23.

写真 16



『朝日新聞』1942 年 6 月 4 日東京版　朝刊
「バンドンに文化の進撃　息吹く秘密研究所　世界最大のキニーネ工場も接収　南の軍人医学に"戦果"」
【上】バンドンのキニーネ工場　【下】パストゥール研究所・右からオッテン博士・フィッシャー女史・小口少佐
（バンドンにて小池特派員発　友松特派員撮影　陸軍省検閲済）

写真 17



『ジャワ・バル』1943 年 8 月 15 日　16（16－17 ページ）
パストゥール研究所

写真 18



『ジャワ・バル』の写真 17 の方が，インドネシアの人々が研究所で主体的に活躍している印象を与える。『アサヒグラフ』の写真 18[87] も同様の印象を与える。両雑誌で写真交換を行い，また編集長が同一人物によって兼任されていたことを裏付けている。『アサヒグラフ』が開戦を契機に戦時色を強めていった背景の一つには，軍から資金を得た宣伝誌『ジャワ・バル』との写真交換，編集者の兼任があったと考えることもできる。ただし，『ジャワ・バル』がそこに掲載した写真の撮影者の氏名を一切表示せず，またそれらの写真が当地で検閲を受けていることを示す「検閲済」という表示もしなかったのに対し，『アサヒグラフ』には，撮影者，陸・海軍による「検閲済」表示が維持された。編集者が，宣伝誌である『ジャワ・バル』と意識的に区別していたことが分かる。

また，インドネシアの人々を主な対象とした宣伝誌の『ジャワ・バル』は，それが事実ではなかったにせよ，インドネシアの人々の活躍，そして彼らの生き生きとした姿を迫力のある写真で紹介した。識字率が当時 6 パーセントにすぎなかったジャワで，『ジャワ・バル』は魅力ある雑誌となった。1 部について 35,000 部印刷された同誌は，完売した。さらに，『ジャワ・バル』にはインドネシア人作家の短編小説が多く掲載された。その理由は，ジャワに徴用された日本の作家たちが多く宣伝班で働いた背景が指摘されている。実際，徴用作家武田麟太郎が選考委員長となった懸賞小説のコンクールで受賞したインドネシア語の短編小説 3 作品が『ジャワ・バル』に掲載された。たとえそれが，インドネシアの人々に対する宣伝の一つの手段であったにすぎず，また内容について厳しい検閲も行われたが，『ジャワ・バル』は若手インドネシア人作家に活躍の場を提供した[88]。宣伝が，宣伝に終始してしまうのではなく，インドネシア人の主体性を宣伝することが，インドネシア人にとっては将来への希望を持つ役割を果たすこととなったといえよう。しかし，そうした宣伝の役割は，事実を報道するジャーナリズムをゆがめてしまう危険性と背中合わせであることも教訓として忘れてはならない。

おわりに

第 1 章で導いた仮説を，第 2–4 章において所蔵写真や『朝日新聞』，『アサヒグラフ』，『ジャワ・バル』を用いて十分実証できたとは考えていない。今後より丁寧に所蔵写真，そして朝日新聞社，ジャワ新聞社から刊行された雑誌等を検討していきたい。また，所蔵写真を撮影した特派員の人々の心理にも十分注意を払うことができなかったと考える。

戦争に向かおうとする大きな制約が課せられたうねりの中で，当時の新聞報道にかかわった人たちがどの様な道を選択しようとしたのか，あるいはできなかったのか，そこから学ぶことが多いことを実感した。

一次資料

・『朝日新聞』
・朝日新聞社大阪本社所蔵写真
・井川允雄監修『戦時末期敗戦直後新聞人名辞典』金沢文圃閣，2015 年.

---

[87] ・『アサヒグラフ』1018 号（1943 年 6 月 2 日），p. 12

[88] 姫本由美子「日本占領期のインドネシア文学：啓民文化指導所に集った作家たちの作品」『アジア太平洋研究科論集』2011 年 1 月．http://hdl.handle.net/2065/31775

・企画院・大東亜建設審議会編（復刻版，解題　明石陽至・石井均）『大東亜建設審議会関係資料―総会・部会・速記録―』第 1 巻，1995 年.
・『赤道報・うなばら』龍渓書舎，1993 年.
・ジャワ新聞社『ジャワ年鑑　復刻版』ビフリオ，1973 年．原著は，1944 年刊行。
・「富沢有為男書簡　坂崎坦宛」1935 年 8 月 15 日（早稲田大学図書館蔵）
・社団法人同盟通信社　南方総局『南方便覧　昭和十八年版（第一編）』
・西嶋コレクション　D-a-6　ジャワ軍政 13　清水斉『宣伝部回顧』
・『ジャワ・バル』
・『太陽』
・『フロント』

インタビュー

・ロシハン・アンワルへのインタビュー（2010 年 5 月 16 日，ジャカルタにて）.
・武野武治へのインタビュー（2014 年 8 月 14 日，埼玉県にて）.

参考文献

朝日新聞社「写真が語る戦争」取材班『朝日新聞の秘蔵写真が語る戦争』朝日新聞出版，2009 年.
『朝日新聞出版局五十年史』朝日新聞出版局，1989 年.（非売品）
『朝日新聞小史』朝日新聞社，1957 年.（非売品）
朝日新聞「新聞と戦争」取材班『新聞と戦争』朝日新聞出版社，2008 年.
朝日新聞百年史編集委員会編『朝日新聞社史　大正・昭和戦前編』朝日新聞社，1991 年.
井上裕子『戦時グラフ雑誌の宣伝戦』青弓社，2009 年.
インドネシア日本占領期史料フォーラム編『証言集―日本占領下のインドネシア』龍渓書舎，1991 年.
倉沢愛子編『写真記録　東南アジア　歴史・戦争・日本　2 インドネシア』ほるぷ出版，1997 年.
鈴木文史朗著・文史朗文集刊行会編『文史朗文集』大日本雄弁会講談社，1952 年.
田村吉雄編『秘録大東亜戦史　蘭印篇』富士書苑，1953 年.
日本写真協会『日本写真史 1840–1945』平凡社，1971 年.
萩森健一「本社の南方諸新聞経営　新聞非常措置と協力紙」朝日新聞社史編集室，1969 年.（非売品）
早瀬晋三「日本占領・勢力下の東南アジアで発行された新聞」『アジア太平洋討究』27 号，2016 年 10 月.
平櫛孝『大本営報道部』図書出版社，1980 年.
姫本由美子「日本占領期のインドネシア文学：啓民文化指導所に集った作家たちの作品」『アジア太平洋研究科論集』2011 年 1 月. http://hdl.handle.net/2065/31775
姫本由美子「日本占領下インドネシアで語られた『大東亜共栄圏文化』の理念：日刊紙「アシア・ラヤ」上の日本徴用文化人と現地作家の論説を中心に」『21 世紀海域学の創成　―「南洋」から南シナ海・インド洋・太平洋の現代的ビジョンへ』立教大学アジア地域研究所，2015 年 7 月．https://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/CAAS/kaiiki/2/55.pdf
町田敬二『ある軍人の紙碑』芙蓉書房，1978 年.
むのたけじ『たいまつ　十六年』岩波現代文庫　S198，岩波書店，2010 年.
早稲田大学大隈記念社会科学研究所編『インドネシアにおける日本軍政研究』紀伊国屋書店，1959 年.

※本稿は，大阪大学豊中キャンパスで開催された東南アジア学会第 95 回研究大会で報告したものを加筆・改編したものである。また，科学研究費基盤研究（B）一般（課題番号 26284111）平成 26～29 年度「植民地史を書き換える―東南アジアの日本占領行政から見た欧米植民地支配」（代表：早瀬晋三）の補助金を得たプロジェクトの成果の一部である。早瀬代表他，プロジェクトメンバーの方々から貴重なコメントをいただいた。また，朝日新聞大阪本社の永井靖二編集委員からは，資料閲覧にあたって協力をいただいた。この場を借りて，お礼申し上げます。